永田　豊先生を送る

山　形　俊　男（地球惑星物理学専攻）

海洋物理学の教育と研究に三十余年の永きにわたりご尽力された永田豊先生をとうとうお送りする時期になりました。二十数年前，五月祭の出しものをご相談に学部の同輩二人と理学部三号館二階の実験室へお伺いしたのが，まるで昨日の出来事のように思えます。先生には二層流体の界面に生じる内部波の実験を丁寧に説明していただき，これを応用した“dead water”の水槽実験を一号館に設けられた展示会場でなんとか無事に行うことができました。

先生は当時まだ三十代の後半にさしかかったところで，スクリップス海洋研究所のC. Cox博士らと海洋の波浪や鉛直微細構造の先駆的な研究を発展させ，帰国されて間もない頃でした。大きなお体で，海を相手の“水商売”の人は体格もすごい，と細身だった三人は変なところで圧倒されてしまいました。この仲間三人のうち二人が海洋物理学を，一人が気象力学の研究を志すことになったのは，先生の気の置けない“水商売”のお話が大学紛争直後の学部学生の疲れた心にうったえるものがあったのかもしれません。

その後，先生は海洋フロント構造，黒潮変動，南極海の海況，北太平洋中層水の起源など，次第により時空間スケールの大きな現象に興味を移していかれました。その三十余年の研究，教育活動を通じて国内外の多くの学生，院生の指導は勿論，各所の研究者との交流を発展させてきました。公的な委員も数多く務められ，なかでも世界気候研究計画の一環である世界海洋循環実験（WOCE）の国際委員として計画の基礎造りに奔走されたのは耳目に新しいところです。我が国の海洋物理学の教育，研究体制は諸外国に較べてはるかに貧弱で，特に国際計画を推進するのに際しては多くの困難に直面されたことと思います。

私は九州の地に永らく職を得て，先生のお元気なお姿を学会の折などに拝見するだけでしたが，ひょんなことから数年程前に再び先生と同じ研究室に属することになりました。まもなく三号館の玄関脇に四半世紀前に内部波水槽を運んだあのリヤカーとおぼしきものが当時そのままの状態で立てかけてあるのを知り，学内における歳月の過ぎ行くはやさに驚くと共に，先生にご指導いただいた頃を懐かしく思い起こしました。ようやく先生のこまやかな配慮を理解できる歳ともなり，血気盛んな若い頃に忸怩たる思いもします。先生はすっかりダイエットされ，私達の学生時代とはずいぶん外見は変わられました。しかしそのウイットに富んだ語り口はますます磨きがかかり，先生の授業を楽しみにしていたものが多いと聞いています。

先生は最近はオホーツク海・氷海の研究の重要性を広く一般の方々にアピールされ，北太平洋海洋科学国際機関（PICES）の海洋物理学と気候に関する科学委員会委員長としても益々お忙しい毎日です。四月からは三重大学に移られるご予定と伺っておりますが，ますますお元気で内外での御活躍をお続けくださるよう祈念いたしております。